

「氷艶 HYOEN 2019―月光^あかりの如く^{ごと}―」を観て

井野 葉子

はじめに

「氷艶 HYOEN 2019―月光^あかりの如く^{ごと}―」は、二〇一九年七月二六～二八日、横浜アリーナにて開催されたアイスショーで、『源氏物語』をモチーフとした宮本亜門演出の音楽劇である。フィギュアスケーターがスケートリンクを縦横無尽に滑って演じるだけでなく、俳優、歌手、パフォーマンスマンス集団なども加わって繰り広げるエンターテインメントである。長年、『源氏物語』に親しんできた者として、宮本亜門が原典の『源氏物語』をどのように換骨奪胎して氷艶を創り上げているかをいささか記しておきたい。

一 太陽の朱雀と月の光源氏

宮本亜門演出の源氏物語は、太陽の如く君臨する朱雀と、兄の力

に抹消されようとして抵抗する月の如き光源氏との葛藤の物語である。

原典の『源氏物語』では、光源氏は他を圧倒するような美質を持っていて、それに対抗できるような存在は誰一人としていなかった。かろうじて頭中将が好敵手として名乗りを上げていたが、所詮は光源氏のパワーの足元にも及ばない存在であった。その頭中将（役者は福士誠治）はこの氷艶では、光源氏をサポートするだけの良き友人、あるいは惟光のような従者になり下がっている。代わって、この氷艶において、光源氏と競い合い、あるいは光源氏を凌駕する存在となっているのが朱雀である。原典の『源氏物語』では朱雀は影が薄い存在で、容姿においても力量においても光源氏に劣るとされていて、右大臣と弘徽殿女御の後見をバックに帝位に就いた点だけが光源氏より勝っているという役どころであったが、この氷艶においては、才芸においても狩においても、朱雀は光源氏に勝るとも劣らない才能を見せており、二人は優劣がつけられないほどの好敵手

であるとされている。しかし、このような水艶における朱雀像の大きな変貌は、全くの破天荒な作り事ではない。原典においては光源氏の美質が強調される余り、読者が目を背けがちになっていることであるが、本当は光源氏は帝になれなかった敗北者なのである。

一時は謀反の罪を着せられて都を追われる形にもなっている。後に、藤壺との密通によって生まれた光源氏の血を引く息子（冷泉）が帝の位を奪還することにはなるものの、本人が帝になれたか否かという観点で見ると、帝になれた朱雀に対して、帝になれなかった光源氏は、やはり朱雀に負けているのである。朱雀との戦いに敗北する光源氏——原典の『源氏物語』に潜在していた、闇に沈む光源氏像をピックアップして強調して見せたのが水艶であったと言えよう。

プロローグで藤壺（役者は平原綾香）が語った「あの方は、月でございます。……月は夜の孤独の中でこそ美しく輝くものがございます」というセリフは、エピローグで再び藤壺によって語られる。このアイスショーのサブタイトルの「月光かりの如く」にもあるように、光源氏は月の光のような存在である。原典の『源氏物語』でも光源氏は月の光に喩えられることが多いので、一見、水艶は原典の比喩表現を引き継いでいるように見えるが、その意味合いは全く違う。原典では月の光は皇族の類ない高貴さを象徴するものであるが、水艶では暗い影をまとった孤独を象徴している。舞台の終盤の第二幕第十五場の光源氏が「私が愛した者は皆去っていく。幸せになることなく、ただ去っていく。誰一人幸せにできないのか、この

私は！」と絶叫するように、光源氏を愛するがゆえに光源氏の周囲の人々は傷ついて死んでいく。月の光の比喩は、孤独な憂いを抱えて泣き濡れる光源氏を象徴するものであったと思う。

光源氏の誕生時の桐壺帝（役者は西岡徳馬）の言葉「桐壺よ、そなたの子は、月のように光る皇子となるであろう。弘徽殿よ、そなたの子は、太陽のように輝く皇子となるであろう」という予言の通り、太陽のような朱雀と月のような光源氏の二人の葛藤の物語が展開する。それは二人の衣装の色にも象徴されている。鮮やかな朱色とゴージャスな金色を基調とした朱雀の衣装に対して、暗い青色と渋い銀色を基調とした光源氏の衣装。——太陽の朱雀と月の光源氏という対比は、配役にも表われている。

光源氏役に高橋大輔を据えたのは言うまでもない。二〇一〇年バンクーパー五輪銅メダリスト、二〇一〇年世界選手権金メダリストで、表現力豊かで集客力も抜群の日本男子フィギュアスケーターである。高橋の魅力はなんといってもドラマチックなステップである。高橋と言えば、「オペラ座の怪人」のストリートラインステップやヒップホップの「ブラックスワン」のサーキュラーステップ、「マノン」の最後のステップなど、畳み掛けるような迫力のある激しいステップを思い浮かべる人が多いであろう。しかし、その高橋が好んでエキシビジョンに使うのが、「ヤン・ティルセン」（映画『アメリ』より）や「In Kissing You」（映画『ロミオとジュリエット』より）など、憂いを帯びた静謐な曲だ。例えば「ザ・クライシス」

（映画『海の上のピアノリスト』より）のナンバーは、ピアノのいびつな音のはずれが淡々と繰り返される中、片耳に両手をあてる動作から始まって、流れるようなスケートインングを充分に堪能させてくれた後、右手を後ろに伸ばしてスートと前進し、スピードの減速とともに余韻を残して終わる。その繊細な舞いは、不条理な悲しみを体現しているようで、見ている者の心の琴線に触れる。そのような高橋の中の暗く悲しげな影のような部分が、宮本重門の源氏物語の孤独な光源氏像にふさわしいだろう。

一方、朱雀にステファン・ランビエールを配したところに、朱雀の存在感を高めようとする演出の意図が見て取れる。ランビエールは、二〇〇六年トリノ五輪の銀メダリスト、二〇〇五年、二〇〇六年の世界選手権の金メダリストであり、現役時代は、四回転ジャンプはもちろんのこと、スピンの回転の速さ、ポジションの美しさたるや絶品で、ステップの華麗さ、表現力の豊かさ、ただそこに立っているだけで華がある選手だった。もちろん、高橋はバンクーバー五輪ではランビエールに勝つての銅メダルを手にしたのであるが、高橋にとってランビエールはなかなか越えられない偉大な壁のような存在であった。当初は俳優が配される予定であった朱雀の役を、演出の宮本重門がたつての願いでランビエールにオフアーを出したと言う。現実のフィギュアスケート界においてメダルを競い合った高橋とランビエールを光源氏と朱雀に配したのは、光源氏と朱雀が互角の戦いを繰り広げていく物語であることを文字通り可視化した

ものであると言えよう。

二 歌比べ——フィギュアスケートと平安文化の融合

二人の戦いの物語は数々のシーンによって彩られているが、ここでは、平安貴族文化と現代のフィギュアスケート文化との見事な融合を見せる一場面を紹介したい。第一幕第四場の歌比べの場面である。藤壺の入内を祝う宴の席で、藤壺を喜ばせるために歌を詠めと桐壺帝に命令されて、朱雀と光源氏が和歌を詠み、その優劣を競い合うのである。『源氏物語』の原典の紅葉賀の試楽において、光源氏と頭中将が帝の御前で青海波を舞った場面が源泉としてあるのだろう。原典では、光源氏の圧倒的な美しさに頭中将が「花のかたはらの深山木」（紅葉賀巻三二二頁）と評されてしまうのだが、氷艶では朱雀と源氏はどちらも互角の扱いであり、優劣が付けられない結果となった。

まず、ランビエール扮する朱雀が、フィギュアスケートの競技のコンパルソリー⁽¹⁾のように、氷の上をくるくると回りながら軌跡を刻む。リンクの端から端まで滑りながら刻むその軌跡が、柔らかな曲線となり、やがては連綿体の変体仮名の形となり、一首の和歌が現われていく。もちろん氷の上に刻まれた軌跡だけでは観客には見えないので、軌跡をなぞるように、墨で書かれたようなふくよかな黒い文字が氷上に映し出され、それが連綿体の流麗な仮名文字となっ

て一首の和歌が浮かび上がっていくのだ。同時に男性歌手による、メロディーにのせた和歌の言葉が流れる。スケート靴の刻む軌跡と、浮かび上がる黒い文字と、歌声の歌詞は、「和歌」となって同時に観客の目と耳に入ってくる。次に、高橋扮する光源氏が、同じように軌跡を刻む。黒い文字が映し出されて一首の和歌が浮かび上がり、今度は女性歌手の声でその和歌が歌われる。次は朱雀の番で、その次は光源氏の番であるが、次第に息急いきせき切きって、両者入り乱れて氷上を舞っていくこととなる。

ここで歌われた和歌を以下に挙げてみよう。

(朱雀) 九重をかすみ隔つるすみかにも春とつけくる鶯の声

(少女卷七二頁)

(源氏) 物思ふに立ち舞ふべくもあらぬ身の袖うちふりし心知りきや

(藤壺に贈った歌。紅葉賀卷三二三頁)

(朱雀) さしつぎに見るものもが万代をつげの小櫛の神さぶるまで

(若菜上卷四三三頁)

(源氏) よそへつつ見るに心は慰まで露けさまさる撫子の花

(藤壺に贈った歌。紅葉賀卷三三〇頁)

(源氏) 尺きもせぬ心の闇にくるかな雲居に人を見るにつけても

(藤壺を思つての光源氏の独詠歌。紅葉賀卷三四八頁)

朱雀の歌がこの場面とは全く関係のない歌であるのはやむを得ない

ことである。朱雀は原典の『源氏物語』全体で八首の歌しか詠んでいないので、この場面に合うような歌は探すべくもないからだ。一方、光源氏の歌は、全てが紅葉賀卷の歌となっており、いずれも、藤壺を思つての歌となっている。藤壺が見ている中で、藤壺への恋心を込めた和歌を畳みかけたのはこの場面にふさわしいと言えよう。もっとも、大勢の貴族たちが見ている中なので、それらの人々に藤壺への恋心が露見してしまつては困るのであるが、そこは気にするまい。

フィギュアスケートのコンパルソリーのようなターンやステップと、平安時代の和歌を書いた連綿体の仮名文字とが、見事に融合した場面であつたと思う。スピードとともにひらひらと翻ひるがえる袖や袴も美しい。拍手喝采を贈りたい。

三 朱雀と母弘徽殿女御との葛藤

朱雀の次に重要な役どころは、朱雀の母弘徽殿女御であろう。それは配役の上にも表われている。弘徽殿女御を演じるのは、二〇〇六年トリノ五輪金メダリスト、二〇〇四年世界選手権金メダリストの荒川静香である。

息子ゆがに歪んだ愛を押し付け、息子を意のままに操ろうとする母。そんな母の手から逃れようとする息子朱雀の心の葛藤の物語こそが、宮本亜門の源氏物語の重要な核であろう。

水艶では、幼少の頃の朱雀と光源氏が仲睦まじく遊び戯れる場面があり、二人は互いに慕い合う異母兄弟である。原典ではそのような場面はないが、原典の朱雀院は「我、女ならば、同じはらからなりとも、かならず睦^{ちむ}び寄りなまし」（若菜上巻二八頁）——もし自分が女だったならば、実の姉弟であつたとしても、必ず慕い寄つていただろうと発言している。つまり、自分が女だったら光源氏と結婚したかつたと言つていたのである。このように朱雀は光源氏を恋慕つてゐる。ところが、朱雀を帝位に付けたい母弘徽殿女御にとつて、帝の座に就きかねない光源氏は排除すべき邪魔者。弘徽殿女御は、常に光源氏を敵視し、隙あらば抹殺せんと手ぐすねを引いてゐる。

第二幕第三場、側近の長道（水艶のオリジナルキャラクター、役者は波岡一喜）に口説かれた時、弘徽殿女御は「下がれ無礼者。私が産んだあの子以外、私に指図できる者はいない」と言い放つて、幼い朱雀に近づき、朱雀を抱き寄せようとす。すると、幼い朱雀はいいやいやと首を振つて逃げていく。追いかける母。逃げる朱雀。やがて、いつしか大人になつた朱雀が現われ、その顔に触れようとする母を制止して、ひらりと身をかわして、背を向ける。——それは、盲目的な愛情を押し付ける母親と、それを嫌がる息子という母子関係を提示していよう。しかし、それでも母に背けない朱雀は、不本意ながらも母の言うなりになつて、母のあてがつた女を妻とし、母の思惑通りに帝位に就き、母の指図通りに光源氏に毒杯をあおら

せる。しかし、その後の乱闘騒ぎで、弘徽殿女御が今にも光源氏に刃を突き刺そうと襲いかかつた時！なんと朱雀はいきなり弘徽殿女御に刃を向け、母の身を貫き通したのであつた。一観客であつた私はあまりの予想外の展開に息を飲んで、叫び声を上げてしまった。しかし、次の瞬間、私は得心した。母に操られて光源氏を亡き者にしようとしていた朱雀は、幼い頃、光源氏と仲睦まじかつた頃のことを思い出し、突如、改心し、光源氏の命を助けるために、悪の権化と化した母の悪行を止めようとしたのである。母に反発しながらも母に支配されてきた朱雀が、初めて母に反抗して母から自立するためには、母殺しが必要だつたのである。のけぞり、倒れ行く母を、朱雀は愛おしげに抱き締めてから、そつと抱き上げる。母を愛しながらも母を殺した息子の気持ちはいかばかりか。愛する息子の腕の中で息絶える母の気持ちはいかばかりか。原典の『源氏物語』では、朱雀の母への反逆の物語は詳しく語られることはない。しかし、母の反対を押し切つて光源氏の罪を許して光源氏を都に召還させる宣言を發した時の朱雀の心の葛藤は想像に難くない。それは朱雀が初めて母に背いた瞬間であり、あの時、朱雀は母殺しを断行したのでと。水艶は、『源氏物語』の原典に潜んでいた朱雀と母との葛藤の物語を抽出して見せてくれたのだと思う。

四、換骨奪胎

そのほかの、氷艶の換骨奪胎ぶりを簡単に述べよう。

原典の『源氏物語』では、藤壺と光源氏の密通を桐壺帝が知っているとははつきり書かれていない。しかし、原典では、光源氏が、正妻女三の宮と柏木との不義密通の事実を知った時、自らの若い頃の藤壺との過ちを思い出し、桐壺帝が知っていて知らぬふりをしてくれていたのかもしれないと思ひ当たる場面がある。一方、氷艶では、光源氏と藤壺の密会のシーンを見ている桐壺帝にスポットライトが当たるので、明らかに帝は知っているという解釈をしている。桐壺帝が冷泉の後見を光源氏に任せようとするのも、桐壺帝が全てを知っていて、全てを許した上での配慮という解釈である。

光源氏の愛する紫の上（二〇一四年ソチ五輪団体戦金メダリスト、ユリア・リップニツカヤ）を朱雀が横恋慕する展開は、原典の『源氏物語』の朧月夜を巡っての光源氏と朱雀との三角関係の改変であるうか。原典の『源氏物語』では、朱雀は妻である朧月夜が光源氏に心惹かれていることを知りつつもそれに甘んじるという寛容な態度を見せるが、氷艶の朱雀は、光源氏の愛する紫の上を強引に拉致監禁するという非道な面を見せる。あるいは、朱雀が自らの意思で紫の上に恋い焦がれて光源氏と対立するのは、原典の朱雀が六条御息所の娘斎宮に恋をして光源氏に邪魔されるモチーフを使ったのかも

しれない。

光源氏が西海に流されて海賊のパワーを得て再び都に攻め上っていく展開は、原典の光源氏が須磨、明石の地に流離し、明石一族のパワーを得て都に復帰する物語の変奏であろう。女だてらに海賊の長である松浦（氷艶のオリジナルキャラクター、役者は袖希礼音）が光源氏への恋に落ちてしまう展開は、原典の明石の君が光源氏を愛してしまふ展開の変奏であろう。

氷艶において、朱雀一派との戦いで光源氏のために命を落とす海賊の長、光源氏が朱雀一派に毒を盛られた時に自ら毒杯をあおいで死んでゆく紫の上など、光源氏に関わった女性たちが光源氏のために命を落としていく展開を見せるのは、原典の『源氏物語』において、明石の君や紫の上の自己犠牲によって光源氏世界が平穩に保たれることに源泉があるうか。

朱雀が母殺しを敢行して譲位すると、藤壺と光源氏との不義の子冷泉が即位する。原典では、冷泉が我が子であることを光源氏は知っているが、氷艶ではどうやら光源氏は冷泉が我が子であることを知らない設定らしい。藤壺が「若宮が光源氏の子であることは、生涯この胸にしまいます」というセリフを言っているからである。自らの血が冷泉に継承されていることを知らずに、光源氏は朱雀一派の長道によって刺されて殺される。光源氏の死後、光源氏遺愛の笛が藤壺の手を経て冷泉帝に伝えられるのは、柏木遺愛の笛が柏木と女三の宮との不義の子薫へ伝えられるモチーフを使ったのか。

氷艶は原典に潜在していた問題を大きく取り上げてクローズアップしたり、原典のモチーフをかなり大胆に再構成したりしている。しかし、氷艶が原典の『源氏物語』とは違う独自の展開を見せることに愕然とする必要はない。もとより、氷艶と『源氏物語』とは全く別の物語なのだから。原典との繋がりとは違いを楽しめばよいのだから。

注

(1) 一九九〇年まで行われていたフィギュアスケートの種目の一つ。氷上を滑走して課題の図形を描く競技。

※『源氏物語』の本文は新編日本古典文学全集に拠り、()内に巻名、頁数を示す。ただし、私に表記を改めた所がある。

(いのようこ 本学教授)